

オカムラ印刷 株式会社

●代表者/代表取締役社長 岡村 忠雄 ●創業/1966年5月 ●従業員数/40名
●所在地/東京都江東区佐賀2-1-15 ●URL/www.okamura-printing.co.jp

社員の付加価値創出

顧客の要望に知恵出し合う



東海林主任



御代田センター長

創業49年の歴史を持つオカムラ印刷(株)は、「変化に対応・未来に挑戦・顧客第一主義」をモットーに、デジタルワークフローをはじめ、最新の印刷機器を設備し、プリプレスから後加工、物流まで一貫生産体制を敷いている。同社が富士フィルムグローバルグラフィックシステムズの「XMF」を導入し、デジタルワークフローを構築して早5年となる。以前同社はブルーフ、CTPといった出力機ごとにRIPが備わり独立した体制であったことから、個別最適はできても、RIP環境の違いにより、顧客が確認した校正紙と色や体裁が合わないなどの問題が発生し、そのつど現場担当者の知見と経験に頼って解決していた。そ

こで「RIP環境統一・メンテナンスでの時間及びコスト削減を図るべく、ワンソース、マルチデバイスが実現できるセンターRIP式のワークフローの導入を決めた」と同社製造部ODSセンター長の御代田卓見氏は「XMF」の導入理由を語った。

センターRIP運用に切替えを計った後は、どの出力システムでも同じものが出力できるようになり、検版も安心して進められ、ミス・ロスを減らすことに成功している。同社製造部ODSセンターの東海林司主任は「工程間でのデータのやり取りがRIP済みTIFFデータでできるようになったことが大きい。ブルーフもCTPも出力時同じTIFFデータを扱えるので、品質



社員の守備範囲が広がった

の安定性が格段に上がり、出力確認後の刷版での検版作業も確認箇所を絞れるようになった」と安定した工程間の受け渡しのメリットを説明した。さらにXMFの面付け機能を活用することで、校正の段階で印刷用の面付け状態を確認することができ、トータル生産性がアップし作業時間の短縮となっている。そのため、突然の仕事依頼でも素早く対応が可能になったという。同社の場合、夜入稿したデータを即日印刷するケースがある。出力作業時間も限られており、印刷間際に問題が発生するのが一番厄介なのだが、入稿した段階でRIP演算によるデータの不備を早期発見でき、最終出力結果を確認できるため、同社の生産効率は飛躍的に上がっている。

社内全体の効果としては「XMF」ワークフローに変え、「以前は部署ごとに壁がどうしてもできてしまっていた。それがなくなった。つまりDTPの社員が制作したデータをそのまま本紙校正まで手がけるようになり、社員一人一人の守備範囲が広がっている」と御代田センター長は人的効果も述べた。

導入当初ではわずかだったPDF納品が、現状は非常に増えている。「XMF」は当然PDFデータの書き出しでき、お客様から要望されればPDFでのデータ納品も行っている。「XMF」で生成したPDFは出力結果と一致し、かつ簡単な設定だけで並行生成できるため、同社では印刷に付加価値が付けられるサービスとして積極的に対応しているという。

このように生産効率をアップしてきた同社である

が、将来的には同社独自の受注システムと「XMF」を連携させ、仕事の進捗状況を営業が逐一把握できる「見える化」を図りたいと考えている。「受注した内容の一部情報は、受注システムとXMFの二重管理になっている。受注システムとつなげJDFで書き出せば、全社的に一元管理が進み、自動化をさらに進めることができる。そうすることで、人的ミスが減るだけでなく、余計なルーチンワークがなくなり、社員一人一人の付加価値創出に繋がる」と東海林主任は将来展望を述べた。続けて御代田センター長は「社員一人一人の守備範囲をさらに広げ、社員全員がお客様の様々な要望に対して知恵を出し合える環境を作るのが最終目標。そうすることでお客様の満足を得るだけでなく、自社の成長にも繋がる。今、XMFを活用することでそれに近づいている。まずは、垣根のないフローをさらに強固なものにし、広い視野を持った人材を増やしたい」と語った。

なお、同社はIT分野に力を入れており、そのITコミュニケーション事業部ではオンラインストレージ「Pr@home」、動物病院向け電子カルテ「SAFIX」を既に開発及び販売しており、さらにAR事業では独自のARアプリ「ARVenus」を開発及び発売開始している。

特にこのARVenusでは、ロケーション及びナビゲーション付き2ndコンテンツ機能で現在特許出願中である。